鹿児島女子短期大学紀要
第54号（2018）61～67頁

異年齢保育における幼児期の人間関係と指導・援助のあり方

― 九州保育団体合同研究集会の異年齢保育の実践報告から ―

Support for Establishing Relationships in Multi-age Classrooms in Early Childhood Education: On the Papers Published in Kyushu Hoikudantai Research Conference

坪井　敏純
Toshisumi Tsuboi

鹿児島女子短期大学

本研究の目的は，九州保育団体合同研究集会（2008～2019）の異年齢保育の分科会において発表された実践研究を分類し，異年齢保育の持つ意味と指導・援助のあり方を探ることである．従来の研究では，年長児は年少児への思いやりが育ち，年少児は年長児を見て学ぶといったとらえ方が一般的である．しかし，思いやりが育つのは年長児だけではなく，年少児の優しさが育つ基礎となっており，年下の子が年上の子を見て学ぶという方向性も，年下を見て年上の子が影響を受けるといった場面は少なくない．異年齢保育の育ちあうという意味は，双方向性があるという点を本研究では指摘した．

Key Word：異年齢保育，幼児の人間関係，たてわり保育，思いやり，モデリング

はじめに

本研究は2008年～2017年の10年間に九州保育団体合同研究集会で「異年齢保育」の分科会で発表された論文19篇を整理し，その成果をまとめたものである．毎年２つ程度の発表があり，助言者を含め参加者との討議を行い，研究を深めていくという分科会である．分科会の参加者は15年前の2002年には参加者が17名であったものが，年を追うごとに増加し，2017年には57名になっている．異年齢保育への関心は高まっているが，始めて間もない園や手探りが続いている園，あるいは保育士の保育経験の浅さによる戸惑いなどが紹介されて，逆にそれが積極的な討議につながっているように思える．

１．異年齢保育とは

異年齢保育の定義は一般的に，３歳・４歳・５歳など異なった年齢の子どもたちでクラスを構成する保育形態を表す用語で，同年齢でクラスを構成する年齢別保育（横割り）に対して，縦割り保育ともいう．同年齢クラス構成を基礎に異年齢での交流を図る場合でも縦割り保育，あるいは異年齢保育と呼ぶ場合もあるが，その場合は異年齢交流保育と区別したほうが良いのではないかと思われる．また混合保育とは，子どもが少なく，年齢別にクラス編成ができない場合に使われることが多い（坪井，2017）．

宮里（2006）は異年齢保育を次の二つに分類している．一つは理念的異年齢保育（理念型）と呼び，もう一つは，特に過疎地などの小規模園での同年齢でクラス編成が不可能な条件的異年齢保育（条件型）とに分けている．

理念型とは「子どもの成長・発達に良い効果を期待したから」「採用している保育思想・方法論」などによって，保育上の様々な良い成果を期待するもので，条件型は「子どもの人数が少なくて，同年齢クラス編成が難しいから」「待機児童を年齢に関係なく受け入れることができるから」など，やむを得ず，あるいは異年齢保育そのものの意義とは異なる目的で行うものと定義される．しかし，初めのきっかけは，条件的なものであっても，異年齢保育に合った保育を工夫するという積極姿勢に転換することによって，子どもに良い効果が得られたという実践例は少なくない（吉田，2009）．

２．異年齢保育の意義

今回参考にした実践論文は，保育所（認可外を含む）における異年齢保育の報告であるが，保育所保育指針解説（2008）では，「異年齢の編成による保育では，自分より年下の子どもへのいたわりや思いやりの気持ちを感じたり，年上の子どもに対して活動のモデルとしてあこがれを持ったりするなど，子どもたちが互いに育ちあうことが大切です．また，こうした異年齢の子ども同士による相互作用の中で，子どもは同一年齢の子ども同士の場合とは違った姿を見せることもあります．このように，異年齢の子どもたちが関わりあうことで，日々の保育における遊びや活動の展開の仕方がより多様なものとなることが望まれます．」

とあり，一般的な認識としての異年保育のメリットがあげられている（坪井，2005．鈴木（政），1982）．

また同解説では，「異年齢の編成の場合は子どもの発達差が大きいため，個々の子どもの状態を把握した上で保育のねらいや内容を明確に持った適切な環境構成や援助が必要です．こうした配慮により，遊びが充実したものになり，子ども同士での多様な関わりがくり広げられるようになるのです．また，保育士等の意図性が強くなると，子どもが負担感を感じることも考えられます．日常的な生活の中で，子ども同士が自ら関係をつくり，遊びを展開していけるように十分に配慮します．」と述べられており，同年齢の子ども同士の関わりだけでなく，異年齢の関わりが乳幼児には欠かせないものと捉えている．

宮里（2015）は「３～５歳児の異年齢保育では『弟にも，真ん中にも，お兄ちゃんにも役割が変化する関係』『頼り頼られ，あてにし，あてにされる関係』といった多様な人間関係の中で育ちあう」点を異年齢保育の持つ重要な意義と捉え，多様な人間関係は双方向的関係で育ちあうと指摘している．

札幌市及び周辺地域における異年齢保育の実態調査が（2009）に行われ（有効回答数117園），異年齢保育のメリットとして次の内容があげられている（複数回答）．

① 年上の子にとって思いやりの心や自覚・自信・自律心が育っている（35.1％）．

② 年下の子にとって上の子にあこがれ，模倣している．向上心が芽生え，挑戦し，発達が促される．自信・自立心を育てる等（26.7％）．

③ 人間関係能力

擬似兄弟関係，愛着・愛情関係・信頼関係を築いている．葛藤を通して人間関係・社会のルールを学んでいる等（17.2％）．

④ 心の安定・癒し

ほっとする居場所，家庭的な安心感が得られる．心が不安定な子や心に傷を持っている子が心の安定を図り，また癒されている等（11.0％）．

⑤ 障がい児保育，その他の利点

障がい児保育，発達，危険回避，その他様々な利点（10.0％）．

逆に取り組んでいない（導入していない）理由として次のような意見が報告されている（24園），

① 年齢別保育を重視する（50％）

② 異年齢間の関わりは，現状（自由遊び時間等）で十分（29.1％）

③ その他，異年齢保育の実施が条件的に困難であったり，その意義等への認識不足等（20.8％）

④ 年齢別クラス間の人数のバランス調整のため，一時異年齢保育クラスにしたが，バランスがとれた時点で年令別保育に戻した（4.2％）

ここから読み取れることは，取り組んでいない理由は年齢別保育が保育の基本であり，特に 異年齢間の関わりについて配慮する必要性をあまり感じていないという結論を得ている．

３．実践事例と考察

紹介する実践研究は異年齢クラスやグループ全体を対象とするものと，人間関係に困難を抱えた幼児に焦点を当てたものとに分類されるが，ひとつの研究に両方が含まれているものが少なくない．また，異年齢保育と年齢別保育の関係性についても言及された報告もある．

では，実践論文をいくつかのテーマに分けて紹介し，考察を加える．

(1) 同年齢の仲間と上手く関われないが，年下との関わりが心の居場所となっている

① 丸山（2017）の事例

「おうち」（１～５歳までを含む27名のグループの名称）の年長男児Ｙの例を挙げている．「Ｙは喧嘩や思ったことと違うことになって，トラブルになったとき，自分の気持ちを伝える前に泣いてその場が終わってしまう．また年下の子と喧嘩になったら手が出てしまうといった行動傾向がある．同年齢の子と遊ぶこともなくはないが，関わろうとするといざこざになることが多い．遊ぶときは，年下の子と遊ぶ姿が多く見られ，年少の子に対しては優しく気を配って関わることができる．」

② 吉村（2017）の事例

３～５歳児の27名のクラスの年長Ｋ（男児）の記録を報告している．「Ｋは自分の気持ちが言葉にして伝わらず，トラブルが多い．関わりたいが強く言ってしまって怒っていないのに怒っているように思われてトラブルになる．Ｋは好きな遊びにはとことん取り組みタイプで，あやとりに夢中で，年中のＳ(男児）がＫに教えてもらったあやとりを見せ，先生がＫに「Ｓが喜んどった」と伝えたことで，ＫとＳの二人は遊びの共有がかない，心地よい時間を二人は過ごせるようになった．」

③ 田中（2016）の事例

「３歳児Ｔ（男児）は自分中心で，友達の心をくみ取ることが難しく，ケンカが頻発する．ところが２歳児と遊ぶＴはすごく楽しそうで，真似っこして笑いあう．」筆者は「気持ちは誇れる３歳児として認めつつ，思いっきり遊びきる環境とＴが自由に選択できる時間を大切に・・・．異年齢とは上を見て憧れを抱くだけでなく，一歩立ち止まってもう一度「ようし！」と自分に自信を持つ選択のできる場でもあると思うのです．」と述べ，

年下の子に支えられて成長する年長児の姿を報告している．

④　山口・宮本・奥村（2015）の事例

「年長児Ｙ（男児）は積極的に友達と遊ぶが，自分の思いや主張が激しくぶつかり，うまく遊べない．ところが年少児がままごととコーナーの片づけに手間取っていると「手伝おうか」と声をかけ，毎回一緒に手伝う姿が見られた．同じグループの年少児の食事の準備を手伝ったり，小さい子の生活の手助けをしてあげられることが励みになり，Ｙが「居場所」を見つけたのではないか」と述べている．

⑤　渡（2012）の事例

Ｆ（男児）は３歳児は２歳児と遊ぶことが多く，居心地が良いといった事例が報告されている．

以下の事例は，年下の子ともうまく関われない年上の子を保育士の援助で，少しずつ改善していった事例である．

⑥　瀧聞（2016）の事例

「４歳児のＲは正義感あふれる子だが，衝動的に友達を噛んだりするなど，相手の気持ちに気づくまでには至らないとことがある．３歳児Ｃ（Ｒが意識している子）との関わりが増えると，Ｃの乱暴な行動を先生が「Ｃにしてはダメだと教えてあげるといいよ，怒っていうんじゃなくて，～したらいけないよ」という関わりを提案してみた.」

「しばらくするとＣの乱暴な行為に対しても，「どうして叩いたの」と理由を聞く姿が見られ，これまでの怒り口調から優しい言い方に変わっていく．さらにその理由を聞こうという態度も見られてきた．Ｒは自分の衝動をぐっとこらえ相手の話しをしっかりと耳を傾けることができ，その思いを受け止めることができるようになった．Ｃとの関わりから，Ｒは自分の衝動をぐっとこらえ，相手の話に耳を傾けるよことができるようになり，その思いを受けとめ優しく対応できる力が育ってきた.」

⑦　弓立（2013）の事例

「年長児Ｄ（男児）は落ち着きがなく，友達とのトラブルも多い．クラスの年長児もトラブルになることを避けて，なかなか一緒には遊ばない．またＤに対しても強い口調で話し，言い合いになることも多い．年中さんのお世話をする保育が行われているが，Ｄはなかなかどう接したらよいかわからず，うまく関われない．どうしてよいかわからないままでも，何とか先生の激励やほめ言葉で，少しずつ変わっていく．年下の子にやさしく言葉をかけたり，手伝うが見られてくる.」

⑧　本田（2016）の事例

５歳児Ａ（女児）が同年齢の子から，時として遊び仲間として受け入れられない中で，Ａの遊び相手を見つけるための葛藤が書かれている．同年齢に受け入れられなければ，年下の女の子を選ばざるを得ないという判断が切ない．

これらの事例は，同年齢との関わりがまだうまくゆかず，トラブルになりやすい子が，年下の子に思いやりのある行動をとることができ，年下の子と関わることで園内での居場所を見つけることができた（安定感や安心感を得ることができた）という例である．

別の見方をすれば，年上の子が下の子に優しくすることで，自分を受け入れてもらうという関係がある．思いやりが育つという面は否定しないが，逆に年下の子が年上の子をあこがれたり手本とするなど，いわば接近しようとする意持ちに支えられた関係がこのような関わりを作っているのではないかと思われる．

(2)　年下の子に寄り添う，年下であることに配慮する

①　吉村（2017）の事例

前述したあやとりで仲間関係を築いたＳ（４歳児）とＫ（５歳児）のかかわりの場面である．「４歳児のＳ（男児）がケンカして一人になって，暗い表情で絵本コーナーでソファに座っていた時，Ｋが悲しい気持ちに整理をつけようと葛藤するＳ君の気持ちに共感したのか，Ｓの隣にそっと座り，会話は無いものの絵本を読んであげていた．Ｓは自然と笑みがこぼれていた．今まで自分もたくさん葛藤してきて，寄り添ってもらった経験が，次は自分がしてあげるようになったことに，Ｋ君の心の安定と成長を感じました.」

②　中村（2015）の事例

子ども同士でトラブルを解決していく関係ができた中で，３歳児のＭは自己主張や場合によっては頑固さを示すが，年上の子が受入れ，かかわり方を変えていく様子が示されている．

③　東・松下（2011）の事例

「２～５歳児の異年齢保育で，４月当初は，それぞれの年齢が自分のことで精一杯の状態．少しずつ一緒に生活するにつれて，大きい子，小さい子という理解が生まれ，最近は「～ちゃんは，まだ小さかとやってね」「～ちゃんは，もう６歳やろ」と子ども同士で注意し合っている.」

④　松岡（2008）の事例

「３歳児Ｔ（男児）はやんちゃ坊主，勝手気ままな行動が多い．お誕生会でも後ろの年長児にちょっかいを出していました．保育士が「Ｓお兄ちゃんが好きとだろ，

抱っこしてって言うたい」．ＴはＳに向かって「だっこして」といい，Ｓはちょっと困ったなという顔をしながらも誕生会が終わるまでＴを抱っこしていました．Ｓは思った以上にＴの扱いがうまく，あまり口が達者でないＳがそれが逆にＴが安心していられるのかもしれない．」

⑤　田中（2016）の事例

「１歳児女児Ｍは，何でもできると思っている．年長児から学んで，何でもできるつもりで「ジブンデ」の年齢のＭ．そんなＭを見守ってくれる年長児．ところが教えてもらう立場ではあるが，教えても立ったことを，保育士「はい，してごらん．こうしたらいいからね」と丁寧にご指導」

⑥　伊藤（2009）の事例や，⑦本村（2011）の事例なども，年長児が年下の子に対する言葉かけや態度が，年齢に合わせた対応ができてくる様子を報告したものである．

これらの事例は，同年齢との関わりに問題はない子で，年下の子に対する配慮や思いやりを示した事例である．年上の子が時間をかけながら年少児との関わりを学んでいく様子が見て取れる．吉村（2017）の事例では，著者は思いやりを示したＫ君は，以前に自分のトラブル（葛藤）に寄り添ってもらった経験が今の思いやり行動を生み出す要因となっているのではないかという考察を行っている．つまり優しくされた経験が，優しい行動を身に付ける重要な要因ではないかということである．優しい行動をする側も優しい行動を受ける側も実は，双方が優しさを育てているのである．

田中（2016）の事例は学ぶという行為は人に教えるという行為と表裏一体となっており，教える行為が自信につながっていると同時に，楽しい活動でもある．それを保育士が受け止めて一緒に楽しんでいる．おそらく他の園児では，彼女のそのような行為になかなか付き合ってくれなかったのかもしれない．

(3)　年上の子を思いやる

山口・宮本・奥村（2015）の事例では，「年中Ｔは，はないちもんめは，せんといい，今日も入らず見ていた．はないちもんめをしていたチームが，負けて年長のＲ一人になってしまった．どうするかとみんながドキドキの緊張．そこに年中のＴが年長のＲ近づき，Ｒの顔を覗き込み，すっと手をつないで，『まけーて悔しいはないちもんめ』と一緒に歌い始めたのです．」

この事例は，思いやりは上から下へという一方向性ではないということを表している．思いやり行動は，幼き者，弱き者へ起こりやすいが，しかしそれは年齢とはあまり関係がない．保育所実習に行った学生が園児に励まさせたり，優しくされるといった事例もあるように，双方の関係性が思いやり行動を生起させる一つの要因であろう．

(4)　異年齢保育の上下の関係

①　田布尾（2009）の事例

「一緒に過ごしていくなかで，最初は４歳児の遊びに３歳児が加わることが多い．混合グループにすることで，４歳児は３歳児のことをよく気にかけるようになり，３歳児は４歳児に対しても，自分の思いを伝えられるようになり，お互いがさらに近づいてきた．」

②　吉村（2017）の事例

「異年齢保育を始めたころは，小さい子が５歳児にあこがれている姿や素敵なモデルになっている姿に注目していましたが，振り返ると横のつながりでは得られなかった，縦のつながりや斜めのつながりという多様なかかわりによって，一人一人が自分は自分でいいんだと思える保育なのだと思います」と述べ，多様な人間関係が心の安定につながっているという．

③　白石（2012）の事例

「２歳児は大きい子たちと過ごすことで，やってみようという動機づけができ，大きい子たちにとっては自然に自分らしさを出せるようになってきている．年齢幅を２歳からに広げたことで，『できないこともあるんだ』『まだできなくてもいいんだ』という許される雰囲気が，大きい子たちの緊張感をほぐしているのではないか」と考察している．

④　田布尾（2009）の事例

「一緒に過ごしていくなかで，最初は４歳児の遊びに３歳児が加わることが多い．混合グループにすることで，４歳児は３歳児のことをよく気にかけるようになり，３歳児は４歳児に対しても，自分の思いを伝えられるようになり，お互いがさらに近づいてきた．」

(5)　異年齢保育と同年齢保育の関係

①　丸山（2017）の事例

「同年齢の子と関わることに，保育士はこだわらなくても良いのかなと思う．しかし，異年齢との関係作りに対して，年長児との関わりがうまくいかない子に，どこまで援助すればよいか迷う．」と述べている．

②　渡（2012）の事例

「２歳児も含めた異年齢保育を実施したが，年上の子どもたちの中で落ち着かず，活動も定まらない．そこで二歳児の入ったクラスは，活動を別にして，落ち着いた

活動に参加する時間として年齢別にした」．この実践の中で，次のような報告もされている．「最初は手探りで始まった保育は，保育士も手探り子どもたちも手探りであった．しかし２年目は，子どもたち自身が異年齢とのかかわりを身に付けてきたというように，子ども自身が年下，同年齢，年上という複雑な人間関係を乗り切るためには，時間がかかると同時に，その関係を支える保育士の経験も必要なのであろう．」

③　伊藤（2009）の事例

「３歳児の主体性を育てることも大切と考え，３歳児の近い年齢の子を同じグループにする．手伝われることの多かった３歳が自分たちのペースで，自分の力で行い，工夫する．自分のことだけだった３・４歳児が具体的に生活する姿が見られる」．

④　木下豊彰（2008）の事例

「４月当初はどの年齢も同年齢の結び付きが強いと感じることがあったが，日を追うごとに，異年齢の結びつきを深めながら，小グループ活動に取り組んでいたり，自由遊びでは異年齢で遊ぶ姿も見せてくれた．異年齢保育はその年齢や時期には同年齢での活動も取り入れながら，進めるという捉え方が必要ではないか」という提案である．

異年齢保育では年齢別保育を必要としないということではない．異年齢保育を進めるうえで，逆に年齢別保育による同年齢との結びつきを作っておくといった取り組みも大切ではないかという提案も少なくはない．また少人数の園では逆に年齢別保育ができないという課題を解決するために工夫が行われている．保育形態は幼児の活動や目的によって変化するものであり柔軟に取り組み必要であろう（緒方，2001．中松，2001．会沢，2002）．さらに年上と年下の関係が出来上がる中で，自分を出せる関係が形成され，無理に自分をつくる必要のない関わりが生まれているように思える．

特に年齢別保育では「できる」「できない」ことに焦点が当てられやすく，自己肯定感の形成にマイナスの影響が生まれやすい．それを防いだり回復することが異年齢保育の持つ力といえる（宮里，2013．渡邉，2014）．

(6)　年下の子が手本

①　萩野（2015）の事例

「５歳のＳ（女児）は恥ずかしがりやで，皆の前で走れない．ふれ合い会の日には走るといって，リレーの練習をしない．さっそっても全く動こうとはしない．同年齢のＫのようには速く走れないという思いもあるようだ．ところが，リレーの練習をしている一つ下の年中のＭやKAが葛藤超えて，走ることが楽しくなっていく姿や，同じ年齢のHRやHYがどんどんリレーに燃えていく姿を見ることになる．すると，前日対戦相手を決めたくじ引きを境に，気合スイッチをＯＮにして，誰よりを早く走る順番を言い，最後の練習をし，当日は懸命に仲間へバトンを渡していた．」

筆者は「間と幅の認めることの重要性と，しないということが認められる」ことがポイントであると述べている．つまり，「しない」ということを認めるという意味を，したくなければしなくて良いというという意味もあるが，「しない」状態から「する」という間に，したいけどできない，したくないけどしなくてはいけない，といった葛藤の解決に時間が必要であり，まさに子どもなりの気持ちに折り合いをつけるための「間」であり，それを認める保育の幅が要求されるのであろう．

(7)　年長児の役割

①　永富（2014）の事例

「年長さんへの期待の大きさが，窮屈な生活を強いていた」といった事例が報告されている．よくあるケースで，異年齢保育が年上の子を「お兄さん，お姉さん」役にして，年下の子にはお世話をされる役を担わせるというものである．次の伊藤（2009）も同様の事例である．

②　伊藤（2009）の事例

「５歳児が３歳児のお世話をする役割が与えられていたため，５歳児から言うことを聞かない年下の子を持てあまし，お世話をしたくないという要望や場面が出てきた」．筆者は，５歳児はお世話係ではないのだという反省をしている．また「逆に３歳児は年長児との生活で自分で出来ていたことを手伝ってもらうことが多く，またしなくなる．５歳児のペースで事が運ぶので，ついて行くのに必死．３歳児の主体性を育てることも大切と考え，３歳児の近い年齢の子を同じグループにする．手伝われることの多かった３歳が自分たちのペースで，自分の力で行い，工夫する．自分のことだけだった３・４歳児が具体的に生活する姿が見られる．」

③　松下（2011）の事例

「Ｔ（２歳５か月）おしっこになかなかいかないため，紙パンツが外れない．ある時漏らしてしまって，年長児におしっこ臭いといわれ，ショック受ける．それから自分のカバンから布パンツを自分からはき，見事に紙パンツを卒業する」．

①と②の二つの事例は異年齢保育を行う上でよく陥りやすいものである（坪井，2005）．年上の子にお世話係を担わせ，思いやりを育てようというものであるが，年上の子

にとっては異年齢保育は年下の子の面倒を見る強制的な仕事になり，そこには心が通い合うといったことは望めない．また年下の子にとっても，自分でできることさえ，させてもらえず，退屈な時間を過ごすことになる．また③は大人から言われるよりも「おにいちゃん」から言われることが，自分の行動を見直すきっかけになったのかもしれない．

４．まとめ

保育所保育指針解説（2008）には「自分より年下の子どもへのいたわりや思いやりの気持ちを感じたり，年上の子どもに対して活動のモデルとしてあこがれを持つたりするなど，子どもたちが互いに育ちあうことが大切です.」とあるが，思いやりの心やいたわりの心は，年上の子が年下の子と関わることで生まれるという意味ととれるが，年下の子が年上の子をいたわったり，優しくするような場面も多く見られる．また特に優しさを育てるためには，優しい行為を実践することも必要だが，何よりも自分自身が優しくされる経験がまず必要なのである．つまり年下の子は年上の子に優しくされることによって優しさが育つのである．結局，優しくする方もされる方も，優しい行為を実行することと，優しい行為を受け取るという双方向性によって優しさは育まれるのである．

また，年下の子は年上の子にあこがれを持ち，手本とすること（真似をすること）で成長するという点も，異年齢保育の重要なポイントとされる．しかし，年上の子が年下の子に教えるという，一方向性だけでない点も実践研究では報告されている．知識や技術は確かに年上の子は年下の子に勝るであろう．その意味では一方向性が認められるが，自分にできないことが，年下の子にはできる場面に遭遇したことで頑張ることができたといった事例や，学ぶという行為に含まれる意欲や発想などは，年下の子から学ぶこともある．また年上（年長）という意識が頑張ることを支えているという側面も見逃せない．つまり自分は年長であり，年長児は年下の子よりできなければならないし，我慢も必要だという意識が成長を助けている側面は見逃せない．

同年齢との関係つくりが難しい子でも，年下のことの関わりかたは上手であったり，適切な態度が取れる子がいる．上の子にとっては，年下の子に受け入れてもらうことで心の安定が得られたり，自信を持つきっかけともなっている．その意味では同年齢とばかり関わりを持つ保育は，保育者や仲間から非難や否定的な扱いを受け続けることになる子どもたちがいるのである．異年齢との関係が作れることで，社会的なスキルを身に着けるきっかけを得て，同年齢の子どもとの関係づくりにプラスに働くという報告は少なくない．

異年齢保育は年齢別保育を否定するものではない．保育所や幼稚園の人間関係は，家庭におけるきょうだい関係のように年齢の違うきょうだいが普通は一人いるのとは違って，複数の年下，同年齢，年下という仲間関係は極めて複雑である．それを乗り切るためには同じ楽しさを共有することができる（心の通じ合う）仲間がまず必要である．それは同年齢との関わりが比較的容易に達成されるかもしれない．従って同年齢の関わりから異年齢の関わりに進むといったことも考慮しておく必要があろう．特に２～３歳児については，その配慮が必要かも知れない．

異年齢保育は自由保育の形態をとることが多い．あるいは生活と遊びに分けて異年齢と年齢別保育を行っている園も多くみられる．いずれにしても形態としての自由保育を取り入れるためには，子どもの主体性を最も大切にしなければならない．そこでは子どもの意志を尊重し，子ども自身が考え判断し，行動する時間を待つことこそが，子どもの育ちを促し，多様な人間関係による子ども同士の関わりこそが，学びと成長の基盤であろう．

参考文献・引用文献

会沢美鈴　2002　きょうだいのような関係つくりから見えてきたもの　第33回九州保育団体合同研究集会提案集，70-71

緒方三桐　2001　同年齢の充実が異年齢のパワーの蓄えに　第32回九州保育団体合同研究集会提案集，78-79

伊藤沙央里　2009 「それぞれの良さを認め合う仲間作りとは」第40回九州保育団体合同研究集会提案集，66-67

渡邉保博　2014　異年齢保育が提起するもの　保育問題研究，270，147-156

木下豊彰　2009　保育内容の計画性と教育的視点－保育活動から見えてくる異年齢保育の大切さ－　第40回九州保育団体合同研究集会提案集，70-71

木下豊彰　2008 「出来る，出来ないにとらわれない異年齢保育活動」 第39回九州保育団体合同研究集会提案集，82-83

白石直子　2012　異年齢とのかかわりの中で～物を抱きしめて離せなかった２歳歳児の変化　第43回九州保育団体合同研究集会提案集，96-97

鈴木政次郎・高木自子・荒井冽（編） 1982　たてわり保育その実践と理論，チャイルド社

瀧聞奈々　2016　初めての異年齢保育　第46回九州保育団体合同研究集会提案集，74-75

田中理恵　2016　みんなでともに育つ～刺激し合い支え合い一人一人が大切にされる“家族”のような保育園　第46

田布尾鮎美　2009 「みんな一緒の仲間だよ」 第40回九州保育団体合同研究集会提案集，68-69

坪井敏純・山口郁　2005 「異年齢保育の中の子どもたち」 鹿児島女子短期大学附属南九州地域科学研究所報，21，1-10

坪井敏純　2017 「保育内容「人間関係」における異年齢保育の取扱いと今後の課題」，鹿児島女子短期大学研究紀要，53，43-52

坪井敏純，田平まゆみ　2003　交流保育における仲間関係の形成要因とその過程，鹿児島女子短期大学附属南九州地域科学研究所報19，25～32
永富千夏　2014　憧れの年長さんになってほしい～異年齢児の中の５歳児～　第44回九州保育団体合同研究集会提案集，82-83
中松隆子　2001　勇気と自信をもらった交流―小規模保育所における交流保育－　第32回九州保育団体合同研究集会提案集，82-83
中村千晴　2015　そらのおうちでの“くらし”を探して　第45回九州保育団体合同研究集会提案集，88-89
萩野恵理沙　2015 「おうち」ってたのしい！－大家族のように過ごす中で出会う難しさや心地よさ　第45回九州保育団体合同研究集会提案集，86-87
東町子・松下明美　2011　美初めての異年齢保育－「２歳児さんありがとう」 第42回九州保育団体合同研究集会提案集，82-83
本田怜子2016　迷いながらも心を充電できるくらし～異年齢における女の子の人間模様　第46回九州保育団体合同
松岡百合2008「つながれ！子どもも保護者も保育者も」 第39回九州保育団体合同研究集会提案集，80-81
丸山梨恵　2017　暮らしの中で一人一人の気持ちに寄り添っていくこと　第47回九州保育団体合同研究集会提案集，94-95
宮里六郎　2006　異年齢保育，保育小辞典，保育小辞典編集委員会　宍戸建夫・金子利子・茂木俊彦（監修），166ｐ，大月書店
宮里六郎　2015　乳幼児期の保育の在り方について－異年齢保育の視点から－　２異年齢保育実践の動向と到達点，３保育を「暮らし」という視点から問い直す，保育通信724，全国私立保育連盟
Mussen,P & Eiseng-berg,N　1977　Root of Caring, Sharing,and Helping（菊池章夫（訳）1980　思いやりの発達心理，金子書房
本村久美子　2011　カーブミラーまで競争しよう　第42回九州保育団体合同研究集会提案集，80-81
山口洋一・宮本千里・奥村智美　2015　保育所の垣根を超えた地域丸ごと異年齢保育　僻地保育所　第45回九州保育団体合同研究集会提案集，90-91
吉田行男　2009年　札幌市及び周辺地域における異年齢保育の実態調査報告書，北海道大学大学院教育学研究科　乳幼児発達論研究グループ
弓立郁　2013　異年齢の中で見え始めたＤくんのかがやき　第44回九州保育団体合同研究集会提案集，80-81
吉村絵里　2017　異年齢保育，はじめの一歩　第47回九州保育団体合同研究集会提案集，92-93
渡あゆか　2012　異年齢保育二年目を迎えて～見えてきた希望とぶつかった壁　第43回九州保育団体合同研究集会提案集，92-93

（2017年12月１日　受理）